

第一回 桐壺 その一

日本の、神話・物語の一番古い本『古事記』の講義を前回終え、和歌・歌謡を主として研究してきた私は、次は『神楽歌』『催馬楽』『梁塵秘抄』などの講義も面白いかなと思って考えていた。ただ、『梁塵秘抄』も、民謡風な本当に面白さのある歌を抜き出して講義していくと面白いのだが、片っ端から忠実に見ていくのは、わりあいに単調である。それなら、『古事記』の後だから、『源氏物語』をしてみようと思いついたのである。

もう一つ、『古事記』と『源氏物語』の間には、『伊勢物語』というすばらしい短編歌物語がある。『古事記』『伊勢物語』『源氏物語』とたどって来ると、日本の物語の流れ、変化あるいは発展のありようが汲み取れる。四十年の教員生活の中で『伊勢物語』は何回も講義したし、『源氏物語』も幾つかの巻は講義した。これは物語の力であるうか、三十代に講義したときは三十代の分かり方、四十代になって講義してみると四十代の分かり方がしてくる。そして六十代になってみると六十代の分かり方がしてくる。日本の物語の伝統が持っている力を学ぶには、おそらく『伊勢物語』が あんなふうに短編の、そして歌を核にした歌物語であるが 一番よく端的に分かるのではないかと思う。しかし、『源氏物語』は何と言っても、日本の文学の頂点にある。

実は、『源氏物語』の講義には、伝統がある。國學院にもやはり『源氏物語』を講義せられた先生が古くからいられるが、その中で、私に関連した先生の『源氏物語』講義ということになれば、三矢重松先生 三矢文法と言われたほど文法学者として力を持っていられた三矢先生 が「源氏全講会」をやっておられ、そして三矢先生の一歩の弟子であった折口信夫先生がそれを引き継いで講義された。

折口先生の専門はむしろ『万葉集』、古代歌謡、あるいは『古今』『新古今』『玉葉風雅』というふうな日本の和歌の流れを専ら自分の研究対象にしていられた。三矢先生が大正十二年に亡くなられて、すぐその後、折口先生が三矢家のご遺族の許しを得て、源氏全講会を國學院で開くようになる。そのときの最初の挨拶の言葉の中に、「歌の方を専門にやってきた自分にとっては、両刀使いのようなことになるけれども、これから源氏全講会という三矢先生の開かれた全講会を受ける形でやっていこうと思う」というふうに言っておられる。折口先生も、万葉をはじめとする日本の和歌の流れを研究してきた関係から、源氏に入ることを「両刀使用のような形になる」という言われ方をしているのである。

その後、昭和の初めの頃から源氏全講会は慶応の方で開かれることになる。この事情は詳しいことはよく分からないのだが、恐らく國學院の持つ性格が背景にあつたろうと思う。すなわち、國學院は、神道精神を学問の柱としてしっかり持っている一方、なかなかきこえないところがあつて、それが『源氏物語』に対する評価などにも現れてくるがあつたのだらう。

単なる知識の学問と違って、情念を伴う学問が國學院の学問の特色だと私は

思つ。それは國學院の学問のよさであろう。近代の知識ばかりで処理していく学問は、それなりに我々に近代の学問の成果を与えてくれたのだが、同時に、それだけでは本当の日本人としての伝統的な心をとらえるという点では足りないところがある。國學院の学問は、情念というか、あるいは堅苦しい言葉で言えば、道義というものを学問の奥のところに据えて考える、そういう学問である。

私は、國學院に入学してから半世紀以上縁を持ち続けているが、國學院の建学の精神というのはなかなかよくできていると思つ。つまり「およそ学問の道はもとを立つるより大なるはなし」がそれである。「もと」は、既成の概念としてあるのでは全くない。学問というのは、「もと」を立てることが一番大事だ。正しい「もと」を立てようとして「もと」を求め、「もと」を立てることにまず努力することだと言っている。「もとはこうだぞ」と既成のものとして示しているのではない。これは、学問の府としては非常に大事な自由さ、学問の自由である。

私は、伊勢の皇学館から國學院に来たので、そういう違いは非常に身にしみて分かる。私が皇学館にいたときに、学長の山田孝雄博士の平田篤胤観を非常に激しい形で聞かされて感動した。そして皇学館の中等部を卒業して國學院大学の予科に入学して、その最初の年に聞いた折口先生の平田篤胤の学問論が実にすばらしかった。同じ国文学者でも、一人の平田篤胤の見方がこんなにも違うものかと思つた。私が皇学館を卒業したのは十七年で、國學院に入ったのが十八年であるから、そのころの時代相を考えれば想像がつくと思つ。

山田孝雄博士は「現代の篤胤だ」と言われた人である。そういうある激しさを持つている人で、学者としてもがっちりとした実証的な学問をされた人だが、同時に、ある窮屈さがあった。その窮屈さが、戦争中にはある意味でうまく生かされて、例えば谷崎潤一郎の『源氏物語』の新訳が出ていたが、いつの時代でもいるように、敏感に時流に合わせた言論を売り物にしているジャーナリストのような者が、『源氏物語』は、風俗潰乱の書だ、淫乱の書だと昔から言っている、皇室に関してあんな不敬な内容を物語っている『源氏物語』は実にけしからん、それをまた現代語訳して今この時代に出版するのはけしからん」という論調を声を大きくして言ったり書いたりする傾向があつた時代にあつた。それで中央公論社から谷崎源氏が出るのが危ぶまれた。そこで、現代の平田篤胤と評判の高い山田孝雄博士に監修していただいたら、そういう人たちも静かになるだろうと、山田博士が監修になった、そういう時代である。『源氏物語』の中の藤壺の事件のことを皇室と重ね合わせて、不敬であると言いたてた。『源氏物語』が風俗潰乱の書だということは、中世あたりから近世にかけて、漢学者や一部の仏教徒の間からとくに起こっているのだが、近代に入って、戦争中にはさらにそういう窮屈な言い方をしたのである。(続きは、草稿中)

なぜ『源氏物語』なのか、それは追々話をすることにして、まずは読んでいくことにしよう。ただ、最近、実践女子学園の百周年の記念の年ということ、

実践の創立者である下田歌子さんと『源氏物語』というテーマでの講演を依頼された。私は、下田歌子さんのことを詳しく知っているわけではないが、折口先生が下田歌子さんと会った話、下田歌子さんの源氏の講義を聞いた話、逆に下田歌子さんが折口信夫の講義に非常に感心して、自分の信頼している国文科の先生に、折口先生のところへ行って源氏の講義を聞きなさいと言ったということ、そしてその方はずっと先生の歌の弟子になり、先生の講義を聞いていた方であること、そんなエピソードを知っていたので、講演をお引き受けしたのであった。

その講演を準備する中で、今ブームと言ってもよいほど、たくさん『源氏物語』の現代語訳が出ているので、そういう現代語訳を読み比べてみた。そこで私が一番感じたのは、最近の現代語訳は、言ってみれば忠実な訳ではなくて、むしろ現代の感覚で、『源氏物語』を、勝手に翻案している、しかもまるつきりスケールの小さいものに変えてしまっている。紫式部は途方もない女流作家であるから、現代の少々評判の作家でもとても及ぶものではない。それから、物の考え方、男女の愛のあり方も、源氏のあるところのあり方と現代の我々の心のありようを比べたら、我々の心のありようは薄っぺらくてどうにもならない。そういうことを考えると、『源氏物語』のあの内容は非常に重いもので、訳するのにも、できるだけ忠実な逐語訳で訳していくのが正しいことだと思つた。

そういう意味で見ると、谷崎潤一郎は、三度も『源氏物語』を訳し直しているのだが、やはりすごい人だと思つた。自分の気持ちで勝手に原典を翻案するよくな訳し方はしていない。もちろん専門の研究者たちの現代語訳は、多少文章はぎこちなくても、忠実な逐語訳を心がけて訳しているもので、そういうものをお読みになるべきだと思う。現代の新しい訳は、正しい言葉の内容を追っていかない、現代的な気分で訳してある訳し方であつて、それは、『源氏物語』の一番微妙な心を伝えるにはあまり適した訳し方だとは思わない。下田歌子さんの訳などは、忠実に逐語訳をしていられる。

同じことは、和歌についても言える。最近では、大意という形で和歌の大体の意味をつまんで、参考に出すという傾向が多いのだが、特に和歌の現代語訳は、できるだけ歌の流れ、調べ、勢いを曲げないように訳することが必要だと思つた。それはなかなか難しいし、いろいろな障害が古くなれば古くなるほどあるもので、大意という形で大体の意味を示されるのは気持ちとしては分かるけれども、研究者としてはできるだけ歌の流れ、調べを大切にしなければならない。折口先生はよく「歌を下からひっくり返して訳する癖の研究者がいるけれども、あれはだめだよ、やっぱり五七五七七の歌の順序、言葉の流れ、調べというものが大事なのだから、訳といえども下からひっくり返して訳する癖の人は間違っているのだよ。ただ、『新古今集』などでは、どうしてもひっくり返して訳さないといと訳せない歌が出てくる。それはしょうがないけれども」と言っておられた。こういうことは物語でもやはり大事なことだと思つた。

いづれの御時おほんにか、女御更衣にようしこひあまた侍まがらひひ給ひけるなかに、いとやむむことなきはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふ、ありけり。

【口訳】

一体どの天子の御世のことでありましたでしょうか、女御や更衣がたくさんお仕えなさっていらっしやった中で、大層高い身分ではなくて、すぐれて天子のご寵愛の深い方がいらっしやった。

【語釈】

「いづれの御時にか」 この「御」は、当時の読みぐせで「おほん」と読む。

「女御」 天子に侍す女性の中で、后に次ぐ高い女性。

「更衣」 女御の次の段階の女性。

【評釈】

平安朝の紫式部をはじめとして女房たちがどんなふうにもこの物語を読んだのか、あるいは、『万葉集』の歌や『古今集』の歌が、人麻呂や紀貫之などによってどんなふうにも歌われていたのか、実際には分からない。それと同じように、『源氏物語』も、平安朝の、あるいは中世の宮廷の中で女房たちがどんなふうにも語ったのか、正確には我々は復元することができない。ただ、歌は「歌われるもの」であり、物語は「語られるもの」であるという違いは推測することができる。

歌の成立の由来、あるいはその歌がどういう影響力を人々に及ぼしたかという顛末を語る部分が「物語」である。そして、その核になる叙情を表す形が「歌」である。従って、当然、語られる部分と歌われる部分は、聞いているだけではつきり分かる、そういう歌い分け、語り分けがなされていたはずである。

下田歌子さんの『源氏物語』の講義を折口信夫博士が聞きたかったのは、下田さんは宮中に深い関係を持っていた人だから、女房たちの『源氏物語』の語り方が下田さんにきくと伝わっているだろうから、という理由であった。下田歌子さんの方は、自分の教え子に、当時の『源氏物語』の研究者たちの講義を聞いて、ノートにできるだけだけ丹念に取っておいでと言って、いろんな学者のノートを読み比べたらしい。そうしたら、「折口さんという人は、隣の國學院の先生で、まだ若い人らしいけれど、これはすごいね。この人の訳は言葉が確かな形で訳せられていて、気分による動揺、言葉の訳の揺らぎがないね。この人は大した人だよ、この人の講義をずっと聞いてこらん」と言ったという。

それで、於保ミヲさんという人が仲介役となって、そういう二人をお引き合わせて、折口先生も下田さんの源氏を聞いた。そのときに下田歌子さんは既に八十代になっておられ、折口先生は会った後に、「聞いていたほどの美女じゃなかったね」と言ったという。それから、岐阜訛りがあることを指摘された。

これはさすがに言葉の学者として鋭い。下田さんは岐阜の出身で、長い間、東京にいられて、宮廷に入っていられなくても岐阜なまりは残っていた。その下田さんに「はあ、お若い、お若い」と言われて、折口はちょっとたじたじとなったのではなからうか。そんなエピソードがある。

『いづれの御時にか』

これが最初の語り出しである。日本の物語の語り出しには型がある。それは、日本の昔話を考えれば一番よい。

『伊勢物語』では、「むかし、男ありけり」、それが重なってくると、「むかし、男」というふうに略した形、あるいは「男」とさらに略したりしていくが、基本は「むかし、男ありけり」という形で語り出す。民間の昔話では、もっと素朴な形で、「むかしむかし」というふうに言って、そして、「あるところに、おじいさんとおばあさんがあったとさ」という形で語り出していく。これが日本の物語の語り出しの常用文句、物語の定型である。

まず、肝心の人物が生まれてくる一つ前のところから話が始まる。例えば「おじいさんとおばあさんがあったとさ」というふうな形である。そして、主人公の誕生の奇瑞が語られる。『竹取物語』のかぐや姫のように、あるいは桃から生まれた桃太郎や、瓜から生まれた瓜子姫のように。それは、すばらしい美しさと思議な力を持った、並々ならぬ子供である。非常に形が小さかったり、光輝く御子であったり、いろいろな不思議さを伴っている。

こもその書き出しのパターンとして、大筋は似ているのだが、ただ、語り出しの「いづれのおほん時にか」というところが、『源氏物語』の特色である。現代の物語というのではない。百年から五十年ぐらいたかのぼった時期を時代設定して、そして語っていく。はっきりとそうだというふうには言っていないが、大体そういう共通の暗黙の理解というものが、語り手の上にも、聞き手の上にもあったのである。

「こもその書き出しはあらぬが」

この「が」を逆説の接続の形で訳してあるのは間違いである。このころには、「が」は逆説の助詞としては使われていない。「が」が逆説の助詞の使い方方をせられてくるのは十二世紀あたりからである。

折口先生は、「この第一段落の、『いとやむことなきにはあらぬが』の『が』がどんなふうに使われているかで、きちんと源氏が読めているかどうかということが分かるんだよ」と言っていた。

はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かたがた、めざましきものに

おとしめそねみ給ふ。同じほど、それより下臈げらふの更衣たちは、まして安からず、あさゆふの宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心ばそげに里がちなるを、いよいよあかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえはばからせ

給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。

【口訳】

当初から自分こそは帝の寵愛を一番深く得ようと思つて気負つていらつしやる御方々は、この方のことを目ざわりなものとして、軽蔑したり、ねたんだりなすつている。同じ身分の程度の方、あるいは、それより身分の低い更衣たちは、まして心が安らかではない。朝晩の宮仕えにつけても、人の気をもませ、恨みを受けることがかさなつたせいだろうか、病氣の状態が非常に重くなつていつて、心細そうで里下がりがちにいらつしやるのを、帝の方では一層いとおしいものにお思いあそばして、他人の非難なども気になさることもなく、きつと後の世の例えにもなりそんな格別なお扱いでいらつしやる。

【語釈】

「同じほど」 同じ程度の身分の方。

「下臈の更衣たちは」 更衣の中でも、身分の低い更衣。

「あさゆふの宮仕へ」 朝晩の宮仕え。宮廷以外の男女の愛の形は、男の方が日が暮れてから思う女性のところへ通つていく形だが、宮廷は逆で、天子の御座所へ女御・更衣の方が、お召しがあつて通つていく。それぞれの控え場所をいただいており、そこから通つていく。蔑んだり、ねたまれたりしている女性は、その途中で大変なことがいろいろ起る。

「恨みを負ふつもりにやありけむ」 恨みを負つた結果であつただろうか。

「いとあつしくなりゆき」 病氣の状態が非常に重くなつていつて。

「もの心ぼそげに里がちなるを」 非常に心細そうで里下がりがちにいらつしやるのを。里といつのは、宮に対して里、宮廷から外の自分の屋敷である。

「世のためしにもなりぬべき御もてなしなり」 後の世の例えにもなりそんな格別なお扱いでいらつしやる。つまり桐壺の更衣に対する帝のご寵愛は、そんなふうにならぬ扱いが厳しくなればなるほど、また格別に深くなつていく。

かんだちめ、うへ人なども、あいなく目をそばめつゝ、いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ、あしかりけれ、と、やうやう、あめのしたにも、あぢきなう、人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも、ひきいでつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたくひなきを頼みにてまじらひ給ふ。

【口訳】

上達部や殿上人なども、困つたことだと、そつと目をそばめ、そばめして、むつまじさの度が過ぎて、まぶしいような格別のご寵愛ぶりである。かのもろこしの国でも、こんなことが原因になつて、世が乱れ、困つた状態が起こつてきたことだったと、だんだんとこの広い世間でも、どうにも手の施しようもない

人々の悩みの種になっていつて、例の『長恨歌』の楊貴妃の例をも引きあいに出しかねないほどのなりゆきなので、桐壺の更衣は、大層いたたまれないことが多くなってきたけれども、帝の格別にありがたい御心持ちの、比べようもなく格別であるのを頼みとして、宮廷まじらいをなすつていらつしやる。

【語釈】

「かんだちめ」 神様のお館に自由にあがれる人の意。公卿。三位以上と四位の参議。

「うへ人」 「かんだちめ」に次ぐ四位、五位の人、および六位の藏人。

「あいなく目をそばめつつ」 「あいなし」というのは、あるべき筋の度を越している、程度の激しいこと、あるいはけしからぬことなどを言う言葉。

現代語に訳するときには、訳の上にはつきり出さない方がむしろよい。「あるべきでない」といつぶうにまで言うつと強すぎる。「何となく目をそばめつつ」といつくらの程度。「目をそばめゆる」といつのは、目をそらす、脇目をする、まや目に見るのにはちよつと困るような、そういう気分である。

「いとまばゆき人の御おぼえなり」 大層むつまじさの度が過ぎていて、見るのにちよつと困るような格別の寵愛ぶりである。更衣に対する特別な寵愛ぶりである。

「あぢきなつ」 「あじきなし」は、どうにもならない程度のひどいことを言ひ。

「いとはしたなきこと」 「はしたなし」というのは、中途半端、どっちつかずの状態と「つと」と。

「まじらひ」 宮廷まじらい、朋輩たちとのつき合ひのあり方。

【評釈】

楊貴妃のためしも、ひきこつてくくなりゆく」

玄宗皇帝と楊貴妃の間のただならぬ愛情の深さを歌った白楽天の『長恨歌』の詩がこの巻の構想の根底にあることはよく知られている。ここではつきりと『長恨歌』のことが出ている。

『長恨歌』は、唐の玄宗皇帝とその寵愛を専らにした楊貴妃のことを歌っているのだが、時代をうつとさかのぼらせて、漢の王様のことにして歌っている。楊貴妃への深い寵愛のために国が乱れ、反乱が起こつて、ついに玄宗皇帝は都を逃れて、僻地へ逃れていかなければならなくなる。その途中で楊貴妃は反乱の者によつて殺される。やがて時を経て、反乱がおさまつて、皇帝はまた都へ帰ってくるが、帰るとまた一層、亡き楊貴妃を思う心が深くなつて、あの世の世界にまで特別の力を持った道士を派遣して、その魂を求めさせる。使ひの者が、あの世で姿を変えている楊貴妃とめぐり合つて、玄宗皇帝の思いを伝える。楊貴妃も非常に感動して、自分の記念の品を形見として渡す。そういうことを歌っている長い叙事詩である。

それが日本へ入つてきて人々に大きな感動を与えた。「桐壺の巻」では、こ

れから後もいろいろところで『長恨歌』のことがちらちらと出てくる。それは当時の宮廷の中の人々の共通の知識になっていて、皆『長恨歌』をほとんど暗記していたので、その詩句が部分的に引かれても、すぐに連想が働いたのである。

こついつことは『長恨歌』だけではなく、『古今和歌集』はじめ他の歌集の歌の文句、あるいは李白などの詩の言葉が、物語の中、語りの中にきらりきらりと織り込まれてくる。これも当時の人々の共通の知識になっているから、断片的と言ってもいい言葉、歌の一句、詩の一部分を切り込んできて、それがあがる共通の感動を与えたのである。我々はそのような共通の知的財産を持たないので、そついつところで受ける面白さをだいたい割り引きしなければならなくなってしまうのである。

父の大納言はなくなりて、母北の方なむ、いにしへの人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御かたがたにもいたう劣らず、なにごとこの儀式をもてなし給ひけれど、とりたてゝはかばかしきうしろみしなければ、ことある時は、なほよりどころなく心細げなり。

【口訳】

父の大納言は世を去っていて、大納言の北の方である母は、なかなか由緒のある家柄の出身であって、両親がそろっていて、今（宮仕えをしていらつしゃって）世の評判もなかなか華やかな方々にも、ひどく見劣りしたりすることなく、宮中のいろいろな儀式に関してもひとかどに振る舞えるようにはからいえずっていらつしゃったけれども、格別にこれといって頼りになる後見役がいらつしゃらなかつたからして、何か事あるときには、やはりよりどころがなくて更衣は心細そうにいらつしゃる。

【語釈】

「親うち具し」 両親がそろっていて。
 「もてなし給ひけれど」 宮中の儀式に関しても、ちゃんとひとかどに振る舞えるようにはからいえずっていらつしゃったけれども。
 「はかばかしきうしろみ」 頼りになるたしかな後見役。

【評釈】

「いにしへの人の由あるに」と、
 「いにしへの人」というのは、ただ単に昔の人というだけではなくて、昔、羽振りのよかつた、そういう家の人ということ。歌などにもよく出てくる「ふるき人」という言い方、あるいは「ふるさと」という言い方も、大体同じような気持ちである。「ふるき人」というのは、いろいろな意味に三つも四つも分化していくが、もともとは、昔ひとかどの人であった人、あるいは自分と以前格別の関係にあった人のことをさす。「ふるさと」という言い方も同じで、以

前、都があつて栄えていたところが、都が移つてしまつて、今はさびれているところが「ふるさと」のもともとの意味である。それから転じて、以前、自分と特別のゆかりのある土地、そして自分の生まれ故郷という意味にだんだん広がつていく。「いにしへの人」も、「いにしへ」とか、「ふるき」とか、そういう用語例と同じことである。「由ある」も「いにしへの人」と同じことで、由緒ある家の人であつて、の意。

「とりたてゝはかばかしきうしろみしなれば、ことある時はなほよりどころなく心細げなり」。

母親のことをこんなふうに使っているのも、これから『源氏物語』の中でもあちこちで出てくるが、もちろん男親には男親の財産があり、邸宅がありするのだが、女の方にも伝わっていく財産があり、女の方の持っている経済力が力を発揮することが多い場合がある。殊にこんなふうには父親の方が早く亡くなつてしまつて、女親が支えていかなければならないというときに、そつむぎむぎと何も無いというふうな状態ではない。だから、ある後ろだてはできるけれども、何と言つても父親が亡くなつていく。公的な面で一番力になる人がないということとは、こういう場合に非常に大きな不利になる。これは古代からいろいろ場面が出てくる。

さきの世にも御ちぎりや深かりけむ、世になく清らなる玉のをのこ御子さへ生まれ給ひぬ。いつしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちこの御かたちなり。

【口訳】

ところが、前世でも、帝と桐壺の更衣の間には深いご縁がありだったのだらう。またとないような、清々しい美しさの玉のように輝く男御子さへお生まれあそばした。帝は、早く見たい、早く見たい、いつになったらとお氣遣いなされて、急いで参上をおさせになつて御覧になると、まことにたぐいまれな、すばらしい御子の姿かたちでいらつしやる。

【語釈】

「ちぎり」 前世における宿縁、因縁。この世のあり方は、前世の約束事がすでにできていて、その結果、こんなふうになつてくるのだという輪廻の思想。

「世になく」 非常に強めた言い方。「またとないよつな」の意。

「清らなる」 清々しい美しさ、美しさの中でも最高の清々しい美しさ。

「めづらかなるちこの御かたちなり」 まことにたぐいまれな、すばらしい御子の姿かたちでいらつしやる。これも物語の主人公の最初の印象を伝えている言葉で、同時に、それは昔話の主人公を語るパターンに入っていく。

【評釈】

「玉のをの」御子

「この方は、後に光源氏となる。普通、「玉のようなお子さん」というふうには比喩に使うが、おそらく生まれたときから光輝く御子で、「かぐや姫のような感じの」イメージを含めているのであろう。ここから物語の主人公が誕生していく。

「いじつかと心もながらせ給ひて」

「これは帝の心中である。お産の汚れというものがあるので、昔から宮中ではお産はしない。皇后とか中宮と言われるような方も、このころであると藤原氏などの出の人が多いのだが、藤原氏の屋敷へ下がってお産をなさる。現代は病院で生むのが一番多いが、昔は、村々でも、人里を離れた村境などに産屋うぶやというのを建てて、その産屋に入って産んだ。かなり後世まで、村の共同の産屋というのがある。産気づく少し前にそこへ入って、村の女性たちが共同で手助けをして産む。そして産のさわりがなくなつてから、自分の家へ帰るといふ形をとっていた。ここは、村の産屋とはもちろん違つが、桐壺の更衣も里下がりして御子をお産みになつたのである。

だから、帝はまだ御子の顔を見ていられないわけで、いつになつたらと待ち遠しい気持ちで、待ち望んでいらつしやる。

一のみこは右大臣の女御の御はらにて、寄せ重く、疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞ゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむことなき御思ひにて、この君をば、わたくしものにおもほしかしづき給ふ事がぎりなし。

【口訳】

この帝の第一のお子様は、右大臣家から入つた女御のお産みになつた方で、世間の信頼も重く、疑いもなく、次の位をお継ぎになる皇太子様として、世間でも大事にかけている方だけれども、この新しくお生まれになつた御子様の何とも言えない美しさには引き比べられそうにも思えなかつたからして、帝はこの一の御子に対しては一通りのお気持ちであつて、この新しくお生まれになつた御子様に対して、自分だけの秘蔵っ子のようにして、特別に大事にあそばすこと限りもなかつた。

【解釈】

「一のみこ」 帝の最初のお子様は、右大臣家から入つた女御、右大臣の娘である人がお産みになつた方である。

「寄せ重く」 世間の信頼、人々の信頼も重く。

「疑ひなき儲けの君と」 疑いもない、当然の儲けの君、次の位をお継ぎ

になる皇太子様として。

「おほかたのやむことなき御思ひにて」 一の御子に対しては、一の御子として当然お持ちになる程度のお気持ちであって。

「この君をば、わたくしものにおもほしかしづき給ふ事がぎりなし」 この新しくお生まれになった御子様に対して、自分だけの秘蔵っ子のようにして、この寵愛の深さは限りもなかった。これがまた右大臣の女御の心を非常にいらさせるのである。

はじめよりおしなべてのうへ宮つかへし給ふべきにはあらざりき。

おほえいとやむごとなく、じやうずめかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御あそびのをりをり、なにごとにも、ゆゑあることおふしぶしには、先づまつほらせ給ひ、ある時にはおほとのごもり過ぐしてやがて侍はせ給ひなど、あながちにおまへ去らずもてなさせ給ひしほどに、おのじからかろさかたにも見えしを、このみこ生まれ給ひてのちは、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にもようせずは、この御子のあ給ふべきなめりと、一の御子の女御はおほしうたがへり。

【口訳】

この御子の母に当たる桐壺の更衣は、もともと、並みの女官のようにお側近くの御用などはなさるべきはずの身分ではなかった。世間の尊敬も格別で、身分高い人らしい風格であるけれども、帝がむやみに身近にお引きつけあそばすために、しかるべき宮中の御あそびの折々、またなにごとにつけても、これという趣のある催しのたびごとに、まずこの更衣をお呼び寄せなされて、ある時は、引きつけて、うっかり寝過ごしておしまいになって、世が明けてまたそのまま、次の日もお側にとどめてお置きになるなど、無理にお側を去らず、お扱いなされているうちに、自然に身分の軽いように見えたのだったが、この御子様がお生まれになって後は、大層格別に心を定めてお扱いなさるからして、ひよっとして自分の産んだ御子が、次の天子として東宮にお立ちにならないことがあつたら、それはこの新しい御子がお生まれになったせいだろうと、一の御子の母親である右大臣家の女御は、胸の中でお思い案じなされていた。

【語釈】

「おしなべてのうへ宮つかへ」 桐壺の更衣は、今、帝が格別の寵愛をなさるものだから、いつも自分の身の側に引きつけておかれて、身辺のことまでなさるようになっていて。しかし、本来は、それはもう少し身分の低い者のすることである。帝の寵愛が格別なためにかえって、周りの人々は桐壺の更衣を何となく軽んずるようになってしまっている。

「御あそびのをりをり」「あそび」というのは、この場合は宮中で音楽を奏し歌を歌われること。

「ある時にはおほとのごもり過ぐしてやがて侍はせ給ひなど」 天子が正式のお休みの場所に休まれることが「おほとのごもる」。ある時は、更衣を引きつけて、ふつとつっかり寝過ぐしておしまいになって、世が明けてしまつて、そのまま、また次の日もお側に引きつけてお置きになる。

「坊にもようせずは」 「坊」というのは東宮坊のこと。次の天子として東宮にお立ちになること。ここから先は右大臣の女御の思いの中のこと。自分の生んだ御子様か東宮にお立ちにならないことがあつたら。つまり、次の皇位まで、ご寵愛深い桐壺の更衣の生んだ御子に奪われてしまうのではないかと心配した。

【評釈】

「桐壺の巻」の発端は、まず光源氏の誕生、出生を語り、それから、その母の薄命な様子を語っていくのだが、同時に、ライバルになつてくる家筋も登場させてくる。こついつところから、『源氏物語』の非常に大きな構想が展開し始める。

この物語は、人々の心に、日本の神話・物語が持っている大きな主題（テーマ）を連想させ、共通の記憶を呼び覚ます、そういう伏線も持っている。『源氏物語』に語られている内容だけでも、途方もない大きな、たくさんの人間が複雑に織りなす愛と葛藤の世界なのだが、それが日本の神話から物語への伝統の中の心のありようを踏んでいる。その意味でも壮大なスケールの物語である。

また、和歌は小さい三十一文字の表現だが、古典和歌は、一首の中に長い日本の和歌の伝統の深さを引きずっている。今の我々は、古典の短歌を読むときでも、なかなかそういう読み方はできない。縁語、掛詞、本歌取りというふうな古典短歌の技法は、決して単純な表現技巧、言葉の技巧なのではない。中古の歌、中世の歌が持っている枕詞、あるいは縁語、掛詞といった言語表現上の手法は、実はもつともつと深い日本人の心の伝統の背景を持っているのである。すなわち、一つの言葉が起こさせる連想、さらに、その言葉と次の言葉とがつながつて起こさせていく広い連環の場、あるいは心の中に隠れている記憶のよみがえりというふうなもの働きが共有される。和歌一つ一つが、言ってみれば言葉の、そして心の広がりインデックスになっている。それがあから、枕詞、縁語、掛詞、あるいは本歌取りというふうな表現の手法が生まれ、共通の技法として深まりと広がりを持つていく。

物語も同じで、今の我々は、「この小説の特色」「この小説の独自性」という見方で現代の一つ一つの小説を見ていくが、そういう見方と『源氏物語』の読み方は、かなり違った心の持ちようが必要なのである。